

天使の領域

大村伸一

天使が町にやってきたのは、去年の暮のことだった。

その日はたぶんその月の二十七日で、誰もが朝から古い歌を歌い、歌い疲れて夢も見ずに眠ったから、天使がやってきたことに気付いた者はいなかった。

正確に言えば、二十七日と二十八日の夜の間、天使は足音を忍ばせて静かに町にやってきたのだ。あるいは、二十八、二十九だったのかもしれない。その日の記録には何も残されていないから、今では確かめることもできない。だが、二十九、三十や二十六、二十七ではなかったはずだ。たぶん違うと思う。

二日とも、雪は降ってはいなかった。町の人たちはみな、セーターを着こみ手袋をし、中にはマフラーを巻いた老人もいたが、誰もが口をそろえて、今日はすこしも寒くない日ですと挨拶を交していた。寒くない寒くないという言葉は震えて、歯のなる音が町角に響いていた。

町で唯一のスーパーマーケット光では完熟トマトの大安売りを朝早くからやっていた。そのトマトは、町から10Kmばかり北にある農場から送られてきたものだった。農場がどこにあるのか町の人達は誰も知らなかった。町から北に続く一本の道をどこまで進んでも、農場らしい場所はどこにもなかった。

二十七日には三百九十三個のトマトが売れた。最後のトマトが収穫された時間は午前六時四十七分で、そのとき朝も訪れた。そしてちょうどその時間に、町の南端にある気象天文台は硬い氷に包まれた。

氷は昼過ぎになるまで建物にしがみつき、太陽の光にあっかんべーをしていたが、前の晩夜更かししてテレビを見ていたので十一時二十二分にはぐっすりと眠ってしまった。天文気象台の職員が十一時二十五分に建物に入ると、凍りついた天体望遠鏡の台のあたりに死体が二人折り重なって倒れていた。望遠鏡の凸レンズは朝食のまたたびが昨日の残りものだったのが気に入らないと、レンズを通る光をねじって焦点に決して集まらないようにしていた。そのために、レンズを通った朝日は死体の上で小さなオーロラになり、輝き揺れながらなまめかしいソプラノで追悼の歌を歌って涙をながし続けた。

二人の両手には、それぞれトマトがひとつずつ握り締められていたので、床に広がった血が死体のものなのかトマトのものなのかそれとも両方が混ざっているのか、みんなが舐め

てみるのだが、誰にも判断はできなかった。

トマトは握り潰されていたので、それを食べたために死んだのではないことは明らかだったし、ニュースでも繰り返しそう報道されたのに、翌日二十八日のトマトの売り上げは、七十三個にまで減ってしまった。

二十七日には天使は来なかった。その日は、殺人事件が発生したが、気温も低く食料も豊富だったため、その事件はまたたく間に繁殖し、夕方になると町中に殺人事件があふれていた。ショウウィンドウを覗けば、そこには様々に変装し偽装をこらした殺人事件が、自分だけは正体が分からないはずだと安心しきった表情で立っているのが見えた。

だから天使は、二十八日と二十九日の二日間、闇にまぎれて町へ侵入したのだ。

二十六日にはキフレ大サーカス団も町にやって来た。町の南を流れている流れ川を渡ってきたので、サーカスの団員は誰もが自分の名前を忘れていた。自分の名前を忘れていたことさえ忘れていたために、何も困ったことは起きなかったが、サーカス団の団長は、全十四巻の団員名簿を二千二百円円で古書店あばれに売り払った。

あばれの店主は二十三才の女だった。店の本はどれも店主と肉体関係を持っていて、自分こそが彼女の本当の愛を受けているのだと思い込んでいるので、売り物になる本は一冊もなかった。店主はいつもゆがみ猫の仮面をつけていた。かつて砂漠の王国の占い師がつけていたものとうり二つだというそのゆがみ猫の仮面はもしかするとその女の素顔なのではないかと、店に来る客達は噂している。彼女のかかりつけの医者であるあぶく博士は、彼女は小さな頃に雨の日外で遊んでいたとき、空中を遊泳していた白い融解魚が目の中に入り込み、それ以来虹彩が凸レンズ状になってしまったため、それを仮面で隠しているだけなのだと説明するが、そんなばかげた話を信じるものはいない。

二十六日の夕方、サーカスの人気者大アrikuiが逃げ出した。アrikuiは肩高が7mばかりあったが、どこを探しても見つからなかった。アrikuiの足跡は見つめられると恥ずかしそうに身をよじり視線を避けて逃げ出して砂漠の真ん中を横切り、それから海の中へと身を投げてしまったので、アrikuiの死を疑うものは誰もいなかった。

二十六日の夕方、町の公園に町中の子供達が集まった。子供達は手に手に青色か紫色のトマトを一個ずつ持って、駅へと向かった。駅には自分が何色なのか忘れてしまった色の電車が待っていて、子供達がすべて乗り込むと動き始めた。線路は東と西へと続いていたが、西へ進めば都市にたどり着く。東へはほんの12Kmばかり伸びて、海に沈んでいる。

都市の住人はたぶん神であり、都市は永遠の光に包まれていた。しかしこの町の誰一人としてその都市を見たものはいなかった。都市の住民がこの町に来ることはあったが、そん

な時、彼等はいつでも笑い熊のぬいぐるみを身にまとった。町の人達はそんな彼等にまったく気付くことはなかった。

都市には環状線が巡っていた。交通管理局の計画によって、日に一度だけ環状線を走行する列車がこの町に止まった。都市の交通管理局を研究しているそば屋の店員ふらは、この町は決して都市の一部ではなく、地理的にも都市からずいぶん離れた場所にあるのだから、それは交通管理局の計画ではなく、計画管理局の計画の間違いなのではないかと考えていた。そう考えるたびにふらはそばのどんぶりに指をつっこんで火傷をするので、条件反射によってすぐにその考えを忘れてしまう。毎日、その列車に間違えて乗り込む乗客が二三人いたが、彼等は決してこの町に戻ってくることはなかった。

駅の改札口にはこのように掲示されている。

「今日の死者0名」

「今日の行方不明者3名」

国道をはさんでスーパー光の向かい側にホテル炎がある。

サーカス団は炎に宿泊していた。町中の誰もがサーカスに熱狂し、サーカスを見るために炎を訪れ入れないものは国道や光の屋上や砂漠の砂の上にあつまり炎を凝視し続けていた。夜半になると、炎に火を放つものさえあられ、炎は大きな炎を上げて燃え上がった。

二十七日の朝、北の農場から町へとトマトを積んだトラックを運転していたのは、あの消えたアリクイだった。アリクイはその場で逮捕され、ホテル炎の地下にある監獄に投げ入れられた。アリクイは無実を叫んだが誰もが両手で耳をふさいで、一言だって聞こえはしなかった。

サーカスのブランコ乗りの少女はアリクイの愛人だったのだが、面会さえ許されなかった。なにかの隠し場所をアリクイが少女に伝えるのではないかとおそれたのだが、いったいなにの隠し場所なのかは誰にも分からなかった。

都市から法廷が呼ばれた。法廷は常に事件を追いかけている。彼等は十三人の法廷官と呼ばれ、彼等は正しい判定のみを下す。

噂では、法廷はすでに十日前からすでにこの町に潜入していたのだという。この町の予言者達は、彼等がこの町のすべての事件を解決するために存在しているのだという。また、法廷はこの町の事件のすべての背後にいる黒幕なのだと断定している。

町の主婦達は自分がどれほど法廷を愛しているのかを示すために、夫の目を盗んでは法廷にそれを贈る。この町の既婚男性がみんな盲目なのにはそういう理由がある。しかし法廷

がその目を受け取っているという事実はまったく記録されていない。勿論、賄賂を受け取るほど法廷官は軽率ではない。

二十八日に天使は町にやってきた。町には数え切れないほどの天使が行き交い、数知れない風船が空中で叫び声を上げながら破裂した。家々の窓からは天使の腕や脚、尻が突き出、国道は天使の羽根が散らばり見えなくなっていた。警官が必死に家の中に天使の体を押し込み、国道の羽根を掃き集めていた。ただ、天使の顔は、もしそれがあったとしても、一つとして窓から出ていなかったし、天使が決して見せることのない左手首が国道に落ちてはいることもなかった。

二十八日には軍隊もこの町を訪れた。戦争が始まったのだ。兵士たちはみな青ざめた顔をしていた。兵士の体には静脈しかないので血が黒く濁っているからだ。前線は我が国に迫りつつあると震えながらささやきあっていた。

ホテル炎には、サーカス団と天使と軍隊が宿泊していた。ホテルにはいつでも宿泊者のある部屋と部屋の間には必ず空室があり、満室になることはない。ホテルから出てくる宿泊者が入ったときよりもスマートに見えるのは、きっとそういう仕組みのせいなのだろう。

天文台の死体が頻繁にあくびを繰り返す、そのせいで腐乱が進みはじめた頃、町に雨が降り始めた。町の雨期が始まったのだ。

雨期は七ヶ月の間続き、雨の甘いかおりと冷たい肌触りが繁殖に最も適している紫プラナリアが町にあふれ、視界を閉ざす霧のように町を包みこむ。朝、手足の先端や耳のねじれた部分に指の先ほどの大きさの不透明でねっとりとした感触となまめかしいにおいのするプラナリアのうごめきを感じることは、誰でも最初は不気味に思うのだが、しばらくすれば慣れてしまい慣れるだけでなくそれはやがてなくてはならない快楽を与える刺激になっていく。それでも話をしている最中に相手の鼻の下や股間に脈動する紫色の塊が出現すると、つい笑いだしてしまうのだ。

戦争は次第に大きなものになっていった。気象天文台には一時間ごとに戦況を知らせるように命令が下された。検死がいつまでも始まらず、望遠鏡の周囲に入ることが禁止されていたので、戦況を監視するのは二人の死体の仕事になっていた。彼等の冷静な観察は、軍指令部も高く評価していて、いずれ死体は軍の将校に抜擢されるのではないかと天文台の職員はうらやましそうに噂していた。

町の中央には放送局があった。放送局発行のプログラムを人々は争って買い求める。放送される番組は毎日決まっていて、人気は高かった。朝から翌日の早朝まで、ラジオでは沈黙が、テレビでは暗黒が放送されているのだった。町中の人々がテレビをみつめ続け、ラジオに顔を寄せていた。そうしているとなにか安心できるのだという。

天使は二十八日にやって来たのではなかった。やはり二十六日に来たのだ。キフレ大サーカス団と一緒に動物や一輪車やブランコに変装して町に入り込んだのだ。天使は一目でそれと分かるのでそれ以外にこの町に入る方法はない。

法廷の判決は死刑だった。アリクイは涙を流し無罪を叫んで抗議した。ブランコ乗りの少女は胸に小さな穴があき、そこから空気のもれる甲高い音をたてて気を失った。団長はただ眉をひそめただけだった。北の農場の主人は、奴がそんなだとは知らなかった。善人そうな面をしているから雇ったが、素性を知っていたら決して雇わなかっただろう。それどころか口さえきかなかつたのに違いはない。と誰彼になくわめき散らしていた。

ブランコ乗りの少女は炎のオーナーと光の店長とに両側から支えられながら何処へともなく連れ去られて行った。誰にも咎められなかったのは、二人が誰にも見えなかったからだ。ただ、アリクイだけがそれに気付いたのだが、口をすぼめるとうなだれ、何も言おうとはしなかった。

天使の第二隊が町へ来た日、天文台の死体はすでに骨だけを残して溶解してしまっていた。天文台の台長は年老いた牛鯨で、両手がないことを苦にしていたが、天使が気象天文台を訪問するという連絡を受けると、なにかいいような期待が心に広がるのを感じた。その期待がなになのかを分析するため、すでに骸骨となった死体にカウンセリングを受けたとき、台長は自分が本当は自分ではないことに気付いてしまった。

その早朝、軍の司令官は町に戒厳令を敷くように命じた。しかし、兵士は誰一人その敷きかたを知らなかったので、町には地雷やチーズケーキや老人が敷きつめられてしまった。その上を歩くのは危険だったので結局町を出歩く者は誰もいなくなり、司令官は部下の間違いに結局気付くことはなかった。気象天文台は軍の指令部として徴発され二人の骸骨は指令部直属の情報将校として徴用された。前線は刻々とこの町に近かづいてきていた。

そして前線が町を二分した。光と炎にはさまれた国道の中央を東西に走る直線が前線だった。光では天使が徴用され反抗するものは射殺された。北の農場は敵に占領されたという通報が、その前線の後を追いかけて町にやってきた。勿論、農場が、どちら側の敵に占領されたのかは分からなかった。

雨は静かに降り続けていたが、プラナリアの姿はどこにも見当たらなくなっていた。プラナリアはこの町から逃げ出してしまったのだ。それから予言者達が前線の真上を西に向かって歩いて行った。よろよろとよろけながら歩いていたが、決してどちらかの側に足跡を残すようなことはしなかった。誰も、彼等に銃口を向けなかったのはきっとそのせいなのだろう。

混乱の中でアリクイが脱獄した。山の方へ逃げたという目撃者がいたが、海岸でみかけたという者もいた。町中総出で山狩りをしたが、山にはなにか憎しみを抱いたものの通り過

ぎた跡が残されていただけで、それがアリクイなのかミズスマシなのかは結局誰にも分からなかった。町の人々は不安におびえ、戦況はますます不安定なものになっていった。

誰かが雨雲を突っ切って飛行船で逃げ出そうとした。捕えてみるとそれは気のふれた古書店あばれの店主だった。本が彼女の仮面を剥がそうと襲ってくるのだという。本の子供を身籠っているとも言うが、確かにそのせいか意外な程の怪力をみせ、取り押さえようとした兵士を振り払い怪我をさせた。捕えてアリクイのいた監獄に閉じ込めたが、翌日そこにはもう誰もいなかった。夜遅く、雨雲の間からオレンジ色のロープが降りてきて、それをよじ登っていく女を見たという者がいたが目撃者の姿が誰にも見えなかったので、誰もそれを信じはしなかった。

二人の死骸が軍の司令官に抜擢されてから、戦争はひどく過酷なものになった。都市から運びこまれた複雑な機械が、あとからあとから死体を製造し死体で町は埋まりそうになっていた。この死体が町を守る最後の砦になるだろうと、舌のない司令官は骨と骨をこすりあわせてそう語った。

光の店長と炎のオーナーがばらばらに切断されて国道の上にはばらまかれていた。だが死んでも彼等は誰にも見えなかったのもそれに気付いた者はいなかった。もしかすると彼等は最初から存在しなかったのかもしれない。二人を殺したものは、自分の日記にそう書き付けていた。殺したのはわたしではないとも書いていた。

誰かが誰かを裏切ったようだった。

どちらの国なのかは結局分からなかったのだが、雨雲のずっと上の方で最終兵器が使われた。あまりにも高い場所で爆発したその兵器は、どちらの国にも何も被害を及ぼさなかったが、かつて町のあった場所は果て知れぬ砂漠に変わっていた。

その砂漠には天使だけが生き残っていた。天使達は何もない砂漠の上で寝そべったり逆立ちをしたり愛し合ったり腕を折ったり腕立て伏せをしたりしていたがどこかしら楽しそうには見えなかった。

天使達はやがて二十九日になると、立ち上がりふざけあいながら西の方へと向かった。雨がまだ降っていたが天使は少しも濡れることはなかった。やがて何年かして、天使が都市を見下ろせる丘の上にたどり着いたとき、ほんの東の間だが、雲の一角が裂けて、光が落ちてきた。

天使さえ誰も気がつかなかったのだが、その光の中を注意深く観察すれば、小さくざわめく虹プラナリアの群れが都市の方へと先を争いながら泳いでいくのが見えるはずだった。天使達が気付いたのは都市から冷たい風とともに漂ってくる、欲望に満ちていながらなにひとつ情熱のない腐ったようなおいだけだった。

それからしばらくして雨雲が閉じたとき、都市は虹に包まれながら音もなく崩壊していった。

(おわり)